

2018年教育の行き先 学習指導要領って？

昨年、坂本龍馬が高校の教科書から消えるかもしれないというニュースが一部で話題になりました。このニュースは歴史用語を絞るために坂本龍馬などの有名な人物を歴史用語の選定基準より外そうとしたものでした。しかし、世間の意見も踏まえて、選定基準を変更し、「国民的な関心と呼んでいる人物や事件について」は「歴史への関心を喚起する手がかり」としました。教科書は学習指導要領に沿って作成されています。学習指導要領とは何か、教科書の変更を具体的に解説します。

■学習指導要領とは何か

全国には学校が数多くあります。もし、学校ごと、もしくは先生ごとに学習する内容が異なるとすれば、その学校を卒業した段階でどの程度の内容を習得しているのかわからなくなります。そこで、一定の水準で教育を受けられるようにするための基準が必要となります。これが学習指導要領です。学習指導要領は、文部科学省が学校教育法などに基づき、小学校、中学校、高等学校等の学校種別ごとに、学習目標や大まかな教育内容を定めています。学習指導要領があるからこそ、北海道から九州・沖縄までおおよそ学ぶ内容が同じなのです。公立学校は、学習指導要領や年間の授業時数、地域性や状況に応じて、教育課程（カリキュラム）を編成しています。

■学習指導要領改訂の目玉

学習指導要領は、基本的に10年に一度、大規模な見直しが行われており、昨年に新しい学習指導要領が発表されました。今回の改訂のポイントは「主体的・対話的な深い学び」です。アクティブラーニングともいわれます。「主体的」とは、自分自身が学ぶことに興味をもち、次の学びにつなげていくことです。「対話的」とは、例えば他の人と対話をすることで自身の考えを広げていくことです。「深い学び」とは、例えば問題を見つけ、解決策を考えたり想像したりすることです。

「主体的・対話的な深い学び」は、一教科の話ではありません。学習活動全体を見直して、「何ができるようになるか」を明確にしようとしています。

他の大きな変更点は、小学校からの外国語教育と情報活用能力（プログラミング教育を含む）、道徳の教科書化です。他には、表現力の向上などの言語能力の育成、理数系科目の授業時数の増加、伝統文化に関する知識や体験の充実、職業教育の充実などです。

■教科書の変更

学習指導要領の改訂を受け、学ぶ内容が変わるので、教科書も変更されます。これを教科書改訂といいます。文部科学省が学習指導要領の改訂内容を発表するとすぐに学習指導要領に沿って、民間の出版社によって、教科書が作り直されます。その後、教科書検定を受けることとなります。教科書検定とは、文部科学大臣が教科書として適しているかを審査することです。この検定に合格したものだけが、全国の学校で使用されます。教科書によって異なりますが、現在の教科書は小・中学校で2～8種類あります。

小学校は今年度に、教科書検定が行われます。そして2019年度に、各市町村や都道府県の教育委員会によって、どの教科書を使用するかが採択され供給されます。2020年度から小学校で新しい学習指導要領に対応する教科書を使用します。

同様に中学校や高等学校の教科書も教科書検定や教科書の採択が行われますが、小学校とは、年度が異なります。新しい学習指導要領に対応する教科書を使用するのは、中学校では2021年度から、高等学校では2022年度からです。

(文／学林舎編集部)

2018年子どもと大人の行き先 子どもとの距離感

子どもが自立して学習していくためには、身近な大人である親や先生との距離を保ちながら、良好なコミュニケーションをとることが大切です。今回は、学習成果につながる距離感について述べていきます。

まず、親子関係に限定せずとも、人間関係全般においてうまく信頼関係を構築できなかつたり、トラブルが起こったりする場合には、「親しき仲にも礼儀有り」が実行できずに周囲に不快な思いをさせているケースも多いと考えられます。例えば、自分の勝手な判断で「この人（この子）とは信頼関係が十分できているので、少々厳しいことを言っても聞いてくれるだろう」などと思込み、距離が近すぎて相手に不快な思いをさせてしまうケースです。

では、親子関係において、適度な距離を上手に保つポイントは何でしょうか。それは、お互いが心地よさを感じることです。この距離感は、親子や家族のように日頃から顔を合わせている近い間柄でさえ一人ひとり違うものですので、自分の感覚を基準にして考えることはできません。まず第一にお子さんが感じる心地よさを尊重してほしいと思います。成長途中の繊細な心をもっているお子さんと接するときには、日頃から様子をよく観察して、どれ位の距離を保つことがお子さんの成長にとって一番良いのかを考えることが必要です。このようにお子さんの気持ちや立場を考えて接することは、お子さんが自発的に学習したり、交友関係を広げたりできる自立した人間に成長することにつながります。

親子は最初は一体化していますが、子どもが、学習し成長し続けることによってゆっくりと時間をかけて別々の存在になっていくのです。お子さんの成長過程で、全てを知っておきたいと必死になって情報収集することはよくありません。親の管理が強すぎて、お子さんの成長を妨げることもあります。将来、お子さんが親に極度に依存することにもつながりかねません。最初は心配されることも多いかと思いますが、お子さんを信じて、徐々に適度な距離を保ってコミュニケーション

ンをとれるように行動してほしいと思います。

次に、先生と生徒との距離感について述べていきます。学校の先生以外にも塾や習い事で、先生の指導を受けたり接したりする機会があるかと思います。指導力のある先生は、教え方などの指導スキルが高いうえに、距離を保つことが生徒の成長につながることを熟知しています。しかし、もし先生と生徒との距離が近すぎたら、生徒が先生に依存してしまうことにつながります。そして、そのような状態が継続すると、肝心の学習効果が薄れてしまいます。一方、先生と生徒との距離が遠いと、生徒の気持ちが離れてしまい、目標達成に向けてうまく導くことが困難になります。

では、先生と適度な距離を保ちながら指導を受けるために、生徒側が注意すべきことを2つ挙げたいと思います。まず1つめは、目標についてです。先生は各生徒の目標達成のために日々熱心に指導しています。その目標が先生と生徒の間で共通認識されていなかったとしたらどうでしょうか。先生が適切な指導やアドバイスをできない状況に陥ってしまう可能性があります。学校や塾では定期的に面談が実施されると思います。そのときには、先生に短期・中期・長期の目標を是非素直に伝えて、お互いが共通認識をもって学習を進めていけるようにしましょう。そうすることによって学習効果は格段に上がります。2つめは、先生に対する接し方です。先ほども述べましたが、たとえ指導を受けている期間が長く、親しくしている先生であっても、常に「親しき仲にも礼儀有り」という言葉を念頭に置いて接してほしいと思います。先生は、生徒に学力をつけさせることはもちろんですが、学習をきっかけにして一人の自立した大人に成長してほしいと願いながら指導しています。その先生の思いに恥じないような言葉遣いやふるまいで接することが、生徒自身の成長にも大きく関わってきます。

今回は、親と子、先生と生徒の距離感について、述べました。今回の内容を踏まえて、適度な距離を保ち、コミュニケーションをとることによって、お子さんの自立した学習習慣や将来の目標達成につながることを願っています。

(文/学林舎編集部)

クロスロード Crossroad

第 84 回 文 / 吉田 良治

夏のスポーツから見たこと

今年は日本のスポーツ界でいろいろな不祥事が起っています。悪いことに目を奪われがちですが、日本のスポーツにも素晴らしい出来事はたくさんありました。それらから学び実践しながら、スポーツ界がまた再び輝きを増すことに繋がればと願います。

夏のスポーツといえばなんといっても高校野球です。今年の夏の高校野球は 100 回目の記念大会で、例年の 49 校から 7 校多い 56 校が参加しました。決勝戦は大阪桐蔭高校が史上 2 度目の春夏連覇をかけ、金足農業高校と対戦し、13-2 で大阪桐蔭高校が見事春夏連覇を達成しました。

参加校が増えたことで、最近問題になる熱中症のリスクや疲労の蓄積などの問題は、前半の試合間隔も若干長くなった分、選手への負担や疲労は少し軽減できたのかもしれませんが。しかし温暖化の影響で体温越えの気温も珍しくない昨今、日中を含め最大一日 4 試合行われる高校野球にも、何らかの対応が求められています。選手の健康状況に加えスタンドで応援する観戦者も、熱中症のリスクが高まります。気温の高い日中の試合を無くし、ナイターなどを活用する、甲子園以外にエアコン機能のある大阪ドームなども会場にするなど、色々な意見もありますが、夏休みの限られた期間での実施ということもあって、条件的なことを考えると、すぐに結論が出るものではありません。

そんな今年の夏の高校野球の中で特に素晴らしかった出来事といえば、大阪桐蔭高校の選手が相手選手のけがなどの際、すぐに応急処置に駆け付ける、という行為がありました。とっさのことではありますが、すぐに行動できるということは、日ごろから常に相手の

ことも考えて行動していないと、いざというとき迅速に動くことはできません。スポーツマンシップには 5 つの要素への敬意を持つことが重要とされています。その 5 つの要素を纏めると一つの英語の単語になります。それは“ROOTS”です。ROOTS とは植物の根を意味します。スポーツマンシップの重要な要素としての ROOTS とは、まず“R”が Rule (規則) を意味し、二つある一つ目の“O”は Official (審判)、もう一つの“O”は Opponent (相手)、“T”は Teammate (チームの仲間)、そして“S”は Self (自分自身) を意味します。つまり、スポーツ活動に関わるこれらすべての要素に対し、敬意を持って行動することが、スポーツマンシップの根本 (ROOTS) となります。大阪桐蔭高校の選手が試合中に行った行為は、相手を意味する“O”への敬意を形にしました。そして試合後金足農業高校のエース吉田輝星投手のもとには、大阪桐蔭高校の選手たちが駆け寄り健闘をたたえ合いました。スポーツマンシップがしっかり根付いたチームであることがわかります。

夏のはじめに行われたサッカーワールドカップでは、日本代表チームがグループリーグを勝ち上がることができた要因として、反則数の少ないことによるフェアプレイポイントがありました。つまりルールに則って試合をした証である“R”への敬意を形にしたわけです。また日本代表チームはベスト 16 で敗退後、使用したロッカールームをきれいに清掃してスタジアムを後にしました。つまり、これはロッカールームをチームの仲間と見立て、“T”への敬意であり、そして潔く去る“S”の自分自身への敬意を意味します。

今年スポーツ界では様々な不祥事が発生しています。大阪桐蔭高校の選手やサッカーワールドカップ日本代表チームが示したスポーツマンシップ像から、スポーツ界はしっかり学んでいただきたいと願います。

(つづく)

吉田良治さんプロフィール

1962年生まれ。1998年にワシントン大学へアメリカンフットボールコーチ留学。2000年リーグ制覇、2001年ローズボウルに出場し、ローズボウル制覇に貢献。国家レベルのリーダーシップ教育に貢献した。ランブライト元ワシントン大学ヘッドコーチよりリーダーシップ教育を学ぶ。
全米の大学で人格形成プログラム普及に貢献した、ライス元ジョージア工科大学体育局長よりライフスキル教育を学ぶ。

吉田良治さんBlog <http://ameblo.jp/outside-the-box/>